

51. 守山市服部遺跡出土 の磨製石剣について

守山市服部遺跡からは、竪穴住居址などより、6口にのぼる磨製石剣が出土している。いずれも鉄剣型でA地区より出土した①は、ほぼ完形の優品である。ここでは簡単に、その概略を紹介しておきたい。

① A地区5号方形周溝墓(M5)上層の堆積土中より発見されたもので、出土層位は不明確であるが、M5はおおよそ畿内Ⅳ様式前半に位置づけられ、上層にはⅣ様式～Ⅴ様式の住居址があった可能性があり、いずれかに伴うものであろう。刃先が一部破損しているが、ほぼ全形をとどめており、全長22.6cm、最大幅3.5cm、厚さ1.1cmをはかる。鑄は、刃先から、剣身中央を直線的に走り、茎部に至り、茎部は、左右とも斜めにカットして、やや丸くしている。刃は、刃先より13.5cmまでつくり出され、それ以下に、0.14cm幅の「側」がつくられ、茎部に至る。研磨痕は全体にみられ、茎部で一部タテ方向をとるほか、剣身に直交するものが大部分であった。使用痕は明瞭でないが、若干の刃こぼれがみとめられる。

② D地区東端に分布する弥生中期後半の住居址中の一棟より出土したもので、上半部が欠失している。現存長13.3cm、最大幅3.55cm、厚さ1.0cmをはかる。鑄は、剣身中央を直線的に走り、茎部から1.1cmの部分で左右に分枝している。刃は、5.35cmほど残存し、以下0.1cm幅の「側」がつくられている。研磨痕は、全体にみられ、一部でタテ方向、大部分は、右下がりの斜方向をとる。使用痕は明瞭でないが、茎端部については、再加工の可能性も考えられるほか、刃部の損傷は激しく、大きな打撃によるものか。

③ D地区を南東から北東へ流れる奈良後期の溝に流入していたもので、上半の刃部をすべて失っている。現存長9.6cm、最大幅3.0cm、厚さ0.7cmをはかり、鑄は、剣身中央を直線的に走り、裏面においては茎端部から2.1cmのところまで二分枝している。刃部は欠失しており、幅0.14cmの「側」がつくられている。研磨は全体にみられ、大部分が斜方向である。使用痕は不明瞭であるが、刃部の切断面は、きわめて鋭く、大きな

打撃により損傷したことがうかがえる。

④ B地区の南側に所在する、弥生中期後半の竪穴住居址内より出土した刃部破片である。現存長3.35cm、最大幅2.1cm、厚さ0.6cmをはかり、鑄は剣身中央を直線的に走る。破磨痕は全体にみられ、斜方向をとる。使用痕は明瞭でないが、一部に打撃による圧痕がみえ、何らかの打撃により、切断されたものか。

⑤ B地区の南側に広がる、弥生中期後半から後期にかけての竪穴住居址群の一棟より出土したもので、上・下半が欠失している。現存長で4.8cm、最大幅2.7cm、厚さ0.98cmをはかり、鑄は剣身中央を直線的に走る。刃部は1.0cmを残し、以下幅3.2cmの「側」がついている。破磨痕は斜方向のものが全体にみられる。使用痕は明瞭でないが、両面はかなりの強打により破損したと思われる。

⑥ D地区の東側に分布する、弥生中期後半の住居址内より出土したものである。刃部の破片で、上・下半を欠失している。現存長で4.8cm、最大幅2.85cm、厚さ0.78cmをはかり、鑄は剣身中央を直線的に走る。斜方向および剣身に直交方向の研磨痕がみられ、若干の刃こぼれのあるほか使用痕は不明瞭であった。

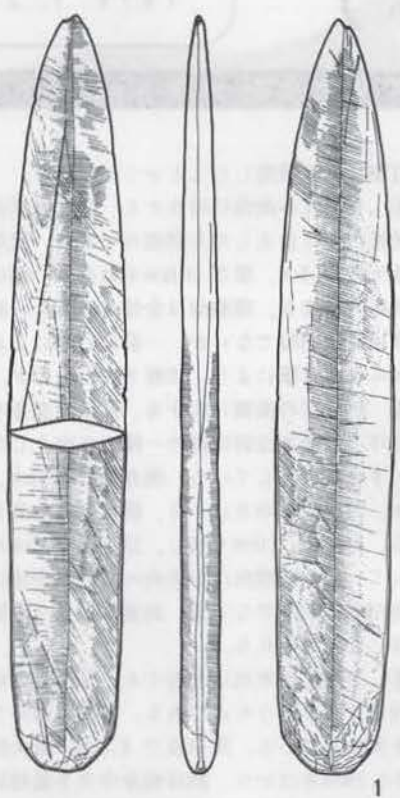
以上、概略を述べたように、服部遺跡出土の磨製石剣は、いずれも鉄剣型で、若干の問題は残しつつも、弥生中期後半に属するものであった。そして住居址内出土のものが多いことも、注目されるであろう。県下におけるこの種の遺物の出土例については、すでに、西田弘、黒崎直氏に報告があり(注1)、西田氏は、その後も出土例の追跡をすすめておられ、16ヵ所、30口を数えておられる(注2)。この種の遺物は、普通実用品ではなく祭器と考えられているが、ここに紹介した①のように、きわめて、鋭利な刃をもつものがあること、服部の場合のように住居址内出土例がかなりあること、何らかの打撃により破損したものがあなど、若干の問題もないわけではない。今後の究明が必要であろう。(大橋信弥)

註(1) 西田弘、江南洋、黒崎直、田村陽子「滋賀県下発見磨製石剣資料」(『滋賀文化財研究所月報』7～9 1968)

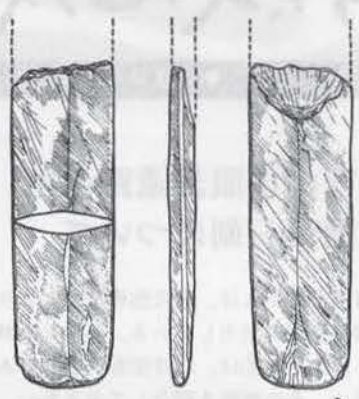
(2) 京都府立丹後資料館編『古代のまつりとくらし』(同館特別展図録 1979)

BS 04
12. 1981

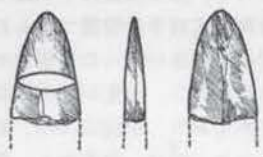
石斧、石刀、石箭头



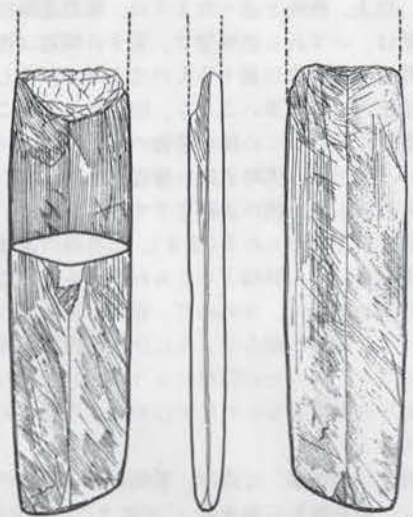
1



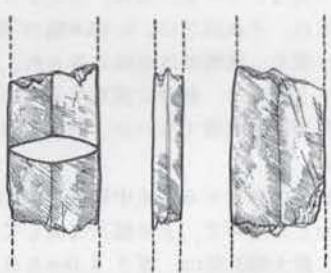
3



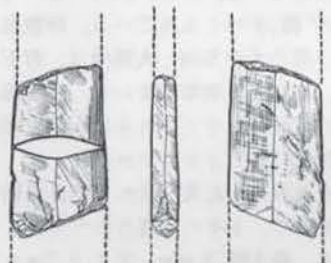
4



2



5



6



52. 三・四世紀の木製鋤

弥生時代以降の社会を根底からささえてきたものは、いうまでもなく水稻農耕であり、農業生産力が各段階の社会を規定してきたといっても過言ではなからう。鋤は鋤とともに農業生産の一翼を担う重要な生産用具であり、農耕技術ひいては農業生産力の解明に欠くことのできない資料でもあろう。ここでは、服部遺跡の弥生時代後期から古墳時代前期に至る旧河道から出土した各種の木製鋤について若干の分類を行ない、当時の農業生産力を解き明かす一助としたい。

出土した木製鋤は、柄と身が一木で作られているか否かによって長柄鋤(A類)と着柄鋤(B類)に大別されるが、着柄鋤はその身の形状がナスビ形を呈するものを新たに区分してC類とする。A類は、刃先がやや尖り気味に丸くおさまり、柄と身が直線をなすもの(A I)と、身が現有のスコップのように内湾し柄と身がわずかながら鈍角をなすもの(A II)に細分される。B類は、いずれも身に着柄軸を作り出して別木の柄を固定する形態をとるものである。B Iは、柄を固定するため着柄軸以外に身の中央付近で斜めの着柄溝及び柄孔が削り出されるものであり、必然的に柄と身は鈍角をなす。図示したものは未製品であり着柄溝及び柄孔はいまだ削り出されていないが、刃子様工具による連続した加工が施され、身の表面を内湾させる一方で対する背面には縦に走る峰が形成されている。B IIは、身の中央が縦に切り込まれて二股を有するものである。着柄軸は短く断面半円形を呈し、端部には瘤状の突起が作り出されている。B IIIは身が狭長で、着柄軸は太くて長い。刃先はやや尖るものと思われる。C類はB類と同じく着柄鋤であるが、身の形態がいわゆるナスビ形を呈するものである。ナスビの蒂にあたる突起の直下に、太い紐状のもので緊縛した痕跡を残す例が数点存在しており、着柄のあり様が推察される。C Iは身の下半が最も幅広く、刃先の尖った形態を保ち、文字通りのナスビ形を呈している。C IIは、身が大きく二股を有するものであり、各刃先は丸味を帯びている。蒂にあたる突起を2箇所を持つ例も存在する。C IIIは、先のB IIIと同じく身が狭長なものである。

以上、概観したように、同じく鋤という機能用途を保ちながらも、その形態は多種多様である。おそらく鉄を装着した後世の鋤と異なり、多目的用途に耐えぬ木製鋤がおのおの最も適する機能的分化をとった結果であろうと理解される。ただ、微差を排除して機能用途別に新たに分類すると以下の3様が確認されよう。その第1は、形態上A I・B I・B IIを典型とし、C I・C IIなどを包括するもので、春先の水田で耕土の反

転作業に適する機能を持つものである。B IIやC IIのような二股鋤は、土との離れも良く、粘性の強い湿田ないし半湿田での反転作業に特に効力を発揮したであろう。C IIはこうした作業以外にも、反転した耕土の荒砕きに利用されたと考えられる。第2は、A IIに属するもので、現有のスコップに類似した用途が考えられ、田面整地のための土の移動などに適している。第3は、B III及びC IIIに属する鋤である。両者のような狭長な形態は、取水・排水等の溝切りに適しており、排湿の必要から深く掘ることが要求される排水用の溝切りにとりわけ有用であったと思われる。

これまで述べてきた形態別そして機能別の分類を通して明らかなことは、3・4世紀の鋤は鉄の装着のない木製鋤であり、弥生時代当初とあまり変わることのない各種の形態—機能的分化を維持していることである。しかも、それらと関連して、湿田ないし半湿田に、より適した機能性を具備する鋤が多い点があげられる。以上のことは、本項で考察するに及んでいないが、鋤についても同様であろうと思われる。

従って、弥生時代当初からこの期に至るまでの「爆発的」とまで表現される遺跡の規模の拡大と数の増加は、それが水稻農耕がもたらした生産の安定に起因するものではあっても、その要因を農具の技術革新に求めることは困難である。3・4世紀の農具の主体をなす鋤や鋤は、弥生時代当初に導入された「完成」した技術体系をほぼそのままの形で維持しているに過ぎず、耕地の拡大も原則として湿田ないし半湿田経営に限られ、生産性の高い乾田経営にまで食指を広げる力量を持たなかったであろう。

弥生時代後期以降この段階における石製品の消失は鉄製品の普及の事実として注目し値するが、それも絶対量の不足から武器・工具等に限定され、当時の社会を根底からささえた農具の技術革新をもたらすには至っておらず、わずかに収穫具としての直刃の鉄鎌の出現をみるに留まる。この段階では、鉄はまだその僅少性故に共同体の集団的所有ないしはその首長の下で一元的に掌握され、広く農具にまで普及するには至らなかったであろう。なお、この期に出現する長方形の鉄板を左右から折り返した鉄製品を、打ち鋤ないし鋤の刃先とする説があるが、おそらく着装の鉄斧の類に属する工具であろう。服部遺跡で、同じく旧河道からその圧痕を明瞭に残す木製台部が出土している。

水稻農耕の導入は、古い共同体質を解体に導く生産力を秘めて出現しており、そこに歴史上の画期をみる事ができたが、3・4世紀においては、鉄の普及が歴史の歯車を早める役割を担いながらも、いまだ農具の技術革新とそれがもたらす農業生産力の飛躍を実現していない。それは5世紀代に始まる朝鮮半島からの

北方系乾田農法の導入と、鉄の国内量産体制の確立を待たねばならなかったといえよう。(谷口 徹)

